

レビ記を学ぶ (2)

塩野和夫

第Ⅱ部 祭司の規定 レビ記8章～10章

第三章 聖さへの招き レビ記8章

1 祭司を問う

(1) 祭司とは誰か

レビ記第1部(1章～7章)は「献げ物の規定」を扱っていた。「焼き尽くす献げ物」(1章)・「穀物の献げ物」(2章)・「和解の献げ物」(3章)と献げ物の種類について記した後、具体的に「贖罪の献げ物」(4～5章)と「祭司と信徒への指示」(6章～7章36節)を取りあげ、「結びの言葉」(7章37～38節)で結んでいた。レビ記第Ⅱ部(8～10章)は「祭司の規定」を扱う。例えば、レビ記8章では祭司の任職式を事細かに記述するなど、祭司に関わる事柄に言及している。

見方を変えて言うと、祭司を立てる神の御心には言及していない。つまり、「なぜ、祭司が選ばれるのか」あるいは「全会衆の前で、なぜ荘重な任職式を行うのか」など、そこにあるはずの神の意図については触れようともしていない。それらはむしろ、自明の前提とされている。しかし、本当に大切なことは神の目的に違いない。祭司が特別な任務に就かされることにはどのような神の意図があるのか。そこからは現在も学ぶべき事柄が豊かにあるに違いない。

だから、2500年前に「祭司とは誰であるのか」をまとめたレビ記から学ばなければならない。祭司とは誰なのか。なぜ、神は祭司を選び、清め、特別に用いられたのか。レビ記第Ⅱ部「祭司の規定」から神の意図を学びたい。

祭司の規定に学ぶならば、それはイエス・キリストの理解を深めることになる。さらに「牧師とは誰なのか」という現代教会の課題の解明にもつながる。だから、レビ

記8章の深みにまで考察を深めて「神が祭司を選び立てられる理由」に対する理解を深めたい。

(2) 祭司の職務

テキストから離れて、祭司の務めについて概観しておく。

ア) 聖所の維持・管理

祭司の務めとしてまず聖所の維持・管理があげられる。聖所、それは荒野を旅した時代には幕屋であった。ソロモン王以降の主たる聖所はエルサレムに建設された神殿となる。この時期の地域社会にはシナゴグが設けられた。ローマ帝国によってエルサレム神殿が完全に破壊された紀元135年以降は、シナゴグがイスラエルにとって唯一の聖所となる。

イ) 神託を告げる

旧約聖書で一つの定式となった表現が、「主なる神があなたがたにこう言われる」である。これはもともと「神託」、つまり神が会衆に告げられた言葉を祭司が語る宣言である。そこで、会衆に対する神託の取り次ぎが祭司の第2の務めとなる。なお、神託を告げる際に用いられた「ウリムとトンミム」については、後で説明する。

ウ) 律法を教える

第3に祭司には律法を教える務めがあった。幼い頃から律法を教える。律法教育によって、イスラエルは代々神の恵みに生かされた。したがって、第3の務めは祭司にとって重要な働きに違いない。ところが、シナゴグでは祭司以外にも律法を教える教師がいて、現在に至っている。

エ) 民に代わって犠牲を捧げる

祭司の重要な職務として、第4に民に代わって犠牲を捧げる務めがあった。イスラエルの会衆が犠牲を携えて聖所にやってくる。祭司は会衆の犠牲を受けとめて神に受け入れられるように捧げた。

神に犠牲を捧げる。それは現在の礼拝に通じる。礼拝において牧師は神と民との間

に立ち、ふさわしく捧げられるように努める。したがって、祭司の第4の務めは牧師の職務に通じる。

(3) レビ記第Ⅱ部「祭司の規定」(8～10章)の位置

レビ記に戻って、レビ記第Ⅱ部の位置を確認しておきたい。まず、聖書の構成からである。

ア) 出エジプト記との連続性

レビ記第Ⅱ部は出エジプト記と二重の連続性を持っている。まず内容に関してである。出エジプト記29章は「祭司の聖別に関する指示」を記していた。この指示に従って、レビ記8章でモーセがアロンとその子たちに任職式を取り行っている。次いで実施事項である。出エジプト記35～39章に記されていたのが「幕屋の建設」である。これに続いて「祭司の任職式」(レビ記8章)が執行されている。

イ) レビ記における位置

次にレビ記における第Ⅱ部の位置を確認しておく。次の通りである。

第Ⅰ部	献げ物の規定	1章～7章
第Ⅱ部	祭司の規定	8章～10章
第Ⅲ部	清潔についての規定	11章～15章

第Ⅲ部では何が清く、何が汚れているのかという「清潔についての規定」が続いている。

ウ) 第Ⅱ部「祭司の規定」の構成

第Ⅱ部「祭司の規定」の構成は次の通りである。

- i 祭司の任職式 8章
- ii 祭司の職務 9章
- iii 祭司の懲罰 10章



牧師任職式

第Ⅱ部（8～10章）はいずれも祭儀における祭司の務めを中心として扱っている。祭司の職務には「(ア)聖所の維持・管理」、「(イ)神託を告げる」、「(ウ)律法を教える」、「(エ)民に代わって犠牲を捧げる」の4種類があった。これらのうち、レビ記8章は「(エ)民に代わって犠牲を捧げる」に集中して言及している。

2 祭司の任職式 レビ記8章

レビ記8章の学びに入る。教会では毎年、神と会衆の前で選出された教会役員の任職式を行う。牧師が教会に就任すると、牧師の任職式を行う。任職式において、牧師は神と教会員の前で誓約をなす。任職式は牧師にとって神の召命を確認する時でもある。祭司の任職式も基本的には牧師の任職式と同様である。ただ、更に丁寧に執行された。

(1) 共同体全員に向かって 8章1～5節

任職式にあたってまず、神はモーセに命令される。「また共同体全員を臨在の幕屋の入り口に召集しなさい」。(レビ記8章3節)

召集されているのは共同体に属する全員である。なぜ、全員が集められたのか。おそらく、「祭司の任職式は共同体全員に関わる重要な出来事である」という認識があった。だから、全会衆が参加して彼ら全員に関わる事柄として祭司の任職式は行われた。

会衆が集まると、モーセは彼らに向かって宣言する。「モーセは共同体全員に向かって、これは主の命じられたことであると言った」。(レビ記8章5節)

(2) 水で清めた 8章6～9節

任職式ではまずアロンとその子たちを水で洗い清める。「モーセはアロンとその子らを進み出させて、彼らを水で清めた」。(レビ記8章6節)「清め」は任職式において繰り返された。「汚れを落とし清くする」行為には、「神にふさわしく整える」意味があったためである。

身体を清めるとアロンは祭司の服を身につける。「そしてアロンに長い服を着せ、飾り帯を付け、上着を着せ、更にその上にエフォドを掛け、その付け帯で締めた」。

(レビ記8章7節) エフォドは肩から腰のあたりに付けた服で、イスラエル12部族の名前を刻んでいた。エフォドは祭司がイスラエルに対して責任を負っているしるしとなっている。

次いで、胸当てに「ウリムとトンミム」を入れる。「次に胸当てを付けさせ、それにウリムとトンミムを入れた」。(レビ記8章8節) ウリムとトンミムは神託を得るためのくじである。

最後に頭にターバンを巻き、金で作った花をターバンに付ける。「また頭にターバンを巻き、その正面に聖別の印の黄金の花を付けた。主がモーセに命じられたとおりである」。(レビ記8章9節) これが祭司の正装であった。

(3) 幕屋とアロンの聖別 レビ記8章10～13節

清めが続く。

祭司の働きの場所である幕屋、祭壇とそこに置かれているあらゆる道具に油を注い

で聖別した。「続いてモーセは聖別の油を幕屋とその中のすべてのものに注いで清め、その油の一部を祭壇に七度振りまき、祭壇とすべての祭具、洗盤およびその台に注ぎかけて聖別した」。(レビ記8章10～11節)「聖別」も「清める」と同じ意味を持つ。ただし、聖別には「神にふさわしいものとする」という含蓄が強い。

その後、アロンとその子らも油を注いで聖別される。「次に、聖別の油の一部をアロンの頭に注ぎ、彼を聖別し、続いて主の命じられたとおり、モーセはアロンの子らを進み出させ、彼らに長い服を着せ、飾り帯を締め、頭にターバンを巻いた」。(レビ記8章12～13節)

レビ記8章は祭司の任職式において幕屋と祭司の聖別を一連の出来事として記述している。そこには神から託われた職務を果たすにあたり、祭司と幕屋を一体とみなす立場がある。

(4) 贖罪と宥めの香り レビ記8章14～21節

アロンたちを清めたうえで、アロンとその子らに対する贖罪の儀式が行われた。この場合に対象となったのは知らずに犯した罪である。「モーセが贖罪の献げ物の雄牛を引いて来させると、アロンとその子らは手を献げ物にする牛の頭に置いた」。(レビ記8章14節)

贖罪の儀式を通して、神によって大祭司に任じられて者としてアロンは会衆の前に立つことができた。

贖罪の儀式を終えると、主にささげる宥めの香りを放つ式に移る。「モーセが次に、焼き尽くす献げ物の雄牛を引いて来させると、アロンとその子らはその頭に手を置いた。……これが主の命じられたとおりの焼き尽くす献げ物であり、燃やして主にささげる宥めの香りである」。(レビ記8章18節, 21節 b)

主なる神に向かって宥めの香りを放つと、任職式は新たな場面へと展開する。

(5) 任職の捧げ物 レビ記8章22～36節

任職の捧げ物が任職式の最後にアロンとその子らによって捧げられる。「モーセがもう一匹の雄羊を任職の捧げ物として引いて来させると、アロンとその子らはその頭に手を置いた」。(レビ記8章22節)

「任職」という言葉には「手に満たす」という意味がある。「何を満たすのか」と

いうと、会衆が捧げた犠牲の献げ物の祭司の「取り分」である。祭司は献げ物の一部を自分の取り分として受け取った。これが「任職」を意味した。

一連の儀式を終える。しかしそれで任職式が終了したわけではない。任職式は7日間を要したからである。「あなたたちは七日にわたる任職の期間が完了するまでは、臨在の幕屋の入り口を離れてはならない。任職式は七日を要するからである」。(レビ記8章33節)

祭司とされる者は7日間、臨在の幕屋に留まった。彼らはこうして正式に祭司へと任職された。

3 神の聖への招き

(1) なぜ、祭司か

レビ記8章から祭司の任職式に関わる細かな規定を学んだ。

任職式は驚くばかりの細やかさで、しかも7日間という時間をかけて行われた。現代人はその慎重さに驚くのではないか。しかし、なぜ祭司の任職にあたったこれほどまで丁重な扱いを求められたのであろうか。

それは祭司が担う職務の重大さの故だと考えられる。共同体に属する誰もが犠牲を捧げて神の清めを受ける必要があった。だから、共同体の全員が神に礼拝と犠牲を捧げる。その際に犠牲がふさわしく捧げられるように祭司を置かれた。

ところで、祭司を任命するにあたって、神が徹底して求められたのは祭司の清さだった。だから、祭司には誰よりもまず神に贖われた者として清さを生きる必要があった。この清さを受けて初めて彼らは神と民との間に立ち、民衆の贖いを取り持つ職務を全うできた。

(2) 神の聖への招き

ここで祭司の任職式が持つ意味を考えておきたい。

あれほどまでに丁寧な任職式を行う意味は何だったのか。それはイスラエルの共同体に属するすべての者を、祭司を用いて神の聖へと招くことである。

聖書には一貫した立場がある。「選び」に関する考えである。たとえば、神の救いの業を開始するためにアブラハムが選ばれた。しかし、アブラハムが選ばれて祝福を受けたのは、「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」(創世記12章3節b)ためである。そのような目的を持つアブラハムの選びだった。

祭司も同様である。任職式において祭司は徹底して神に贖われた清さを要求された。その目的は祭司を用いてすべての民を神の聖へと招くことである。つまり、すべての者は神の聖へと招かれている。神はこの真実を具体化するために祭司を召された。

(3) 大祭司イエス

祭司の働きについて学ぶ時、彼らの職制から教えられるのはイエスの職務すなわち私たちに対して「イエスとは誰なのか」という認識に違いない。

ヘブライ人への手紙は大祭司イエスとしてこの職務について語っている。

さて、わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。

ヘブライ人への手紙4章14-16節

大祭司イエスは「わたしたちの弱さに同情できない方ではなく」、だから「時宜にかなった助けをいただく」ことができるとヘブライ人への手紙は語っている。

そのようなイエスが天においては大祭司として神と私たちの間にいて下さる。慰めに満ちた真実である。

(4) 牧師の職務をめぐって

最後に祭司の職務から牧師の務めについて学ばなければならない。

すべての者が神の贖いの清めを受ける。その儀式がふさわしく執行されるために祭司は置かれていた。この真実は牧師の職制に通じる。つまり現代社会においては、すべての者がふさわしく礼拝を捧げるために牧師は置かれている。

ただし、日本のプロテスタント教会ではなお牧師の職務が確立しているとはいえない。むしろ、「牧師像を模索しつつ形成している」のが現実である。

したがって、レビ記における祭司の職務に学びつつ、豊かでふさわしい礼拝が行われるために牧師の職制確立が望まれる。

4 覚えましょう

(5) 任職式は七日を要するからである。 レビ記8章

祭司の任職式は7日間を要した。神と民衆との間に立って、民の清めの儀式を執り行う祭司には誰よりも神の贖いによる清めが求められた。それが七日間に及ぶ任職式に表現されている。

(6) わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。 ヘブライ人への手紙4章

わたしたちの弱さを思いやることのできるイエスが大祭司として神と私たちの間に立っていて下さる。だから、「言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか」とヘブライ人への手紙は勧めている。

第Ⅲ部 清潔についての規定 レビ記11章-15章

第四章 怖れを越えて レビ記13-14章

1 「汚れ」への恐れ

(1) 聖書における「汚れ」

ア) 生と死への怖れ

レビ記第Ⅲ部「清潔についての規定」(レビ記11-15章)に入る。第Ⅲ部が扱っている事柄の根底には当時の人々の生と死への独得の感覚がある。この感性が日常生活において距離を置かなければならない「汚れているもの」と、触れても良い「清いもの」を分けた。

ここで聖書における汚れについて概観しておきたい。ところで、聖書における汚れは合理的には理解できない。たとえば、レビ記第Ⅲ部は「清い動物と汚れた動物の規定」(レビ記11章)で始まるが、このように動物が区分される理由が分からない。ただ根拠の一つとして人々の経験があったと思われる。つまり、「人がある動物を食べ

たところ、非常に苦しんで死んだ」。そのような経験から「その動物は汚れた物として遠ざけられた」と推測される。

あるいは病気、しかも治療の施しようがない病気である。肉親がこのような病気にかかることによって人々は死の悲しみに陥った。そして、自らの無力さから病気の現実を極度に怖れた。このような「怖れ」も「汚れ」という意識を生み出した。

いずれにしても、生と死に対する人々の鋭い感性が遠ざけるべき「汚れ」を発生させていた。

イ) 宗教的・道徳的不純

次いで、汚れが対象としたのは宗教的な不純に対してである。

そもそも聖書における「清さ」は正しい行いによって得られるものではない。そうではなく、神から与えられた恵みとしての清さである。だから、詩人は「ヒソブの枝でわたしの罪を払ってください わたしが清くなるように。わたしを洗ってください 雪よりも白くなるように」(詩編51篇9節)と祈った。

神が私たちを清くしてください。神を礼拝する者に与えられる幸いが神による清さである。だから、神に対して不純な人は「汚れた人」とみなされた。

神による清さを生きる人は社会も神の清さを保つように求める。そこで、神を抜きにして物事を進める現実が重大な関心事として現れてくる。聖書は神抜きに進められる現実を否定し、抵抗し、「神に立ち帰るように」と警告している。

預言者はこのような働きをした。

ウ) 祭儀からの疎外

聖書における汚れに対して具体的には祭儀からの疎外という形式がとられた。

そもそも人は祭儀に参加して神の清さに預かり、日常生活を営んだ。そして、再び祭儀へと帰る。したがって、聖書の記す清さは祭儀を中心として保たれていた。

ところが、祭司によって「汚れた者」と判断された人は祭儀への参加を許されなかった。たとえば、「重い皮膚病にかかっている患者は、…独りで宿営の外に住まねばならない」(レビ記13章45-46節)とある。彼らは神の清さに預かる機会を奪われていた。

これが汚れと判断された者の悲惨な現実である。

エ) 外面的な「清さ」と交わりの回復による「清さ」

新約聖書の時代に入ると、汚れに対する典型的な対応の仕方が現れてくる。

その一つが形式的に自らの清さを保とうとした人たちの対応である。彼らは汚れた者から距離を置くことによって自らの清さを保とうとした。その動機には汚れへの怖れがあった。だから、動機自体は批判されるものではない。しかし、外面的な清さを保とうとするために、彼らは他者への憐みの心を断っていた。

イエスの時代になると、汚れによって人々は分断されていた。一方に外面的な清さを自負し、憐みの心を閉ざす人がいた。他方、汚れによって疎外され差別され苦しんでいる人がいた。そのような状況にあってイエスは神による内面的な清さの重要性を説かれた。

イエスは汚れによって失われていた人々のもとへ出かけて行き、彼らとの真の交わりの回復を目指された。神の愛は失われた人々を訪ね出して、真実な交わりに回復させるからである。このような行動の動機には汚れに対する外面的な清さを越えて人間性の回復を求める祈りがある。

(2) 汚れに対する怖れ

レビ記Ⅲ部が最終的にまとめられたのは捕囚期かその直後である。しかし、学者の指摘によるとこれらのテキストには捕囚期よりもさらに古くからの伝承が含まれている。したがって、ここに描かれている汚れに対する怖れの観念はかなり古い時代にさかのぼる人々の感性であった。

科学的な知識などない時代に人々の世界は神秘と怖れに満ちていた。たとえば「何か食べて、人が亡くなった」。するとこの出来事は他人事ではない怖れを生んだ。だから、人にはその食べ物で「汚れ」として遠ざけた。あるいは重い皮膚病に苦しむ人々が身近に現れた。すると幸せに暮らしていた関係者が病のために突然、苦しみの日々へと突き落とされていく。そこでこのような病気を人々は非常に恐れた。そこで、重い皮膚病を「汚れ」として自分たちから分離した。

怖れの観念が人々の心に深く存在し、社会を規定していた。したがって、汚れに対する恐怖感がレビ記13-14章の前提となっている。

人々は淡々と「清いもの」と「汚れたもの」を分離したのではない。汚れを怖れ、汚れによって突き落とされていく世界を畏怖しつつ「清いもの」と「汚れた物」を分

けた。その上で、神だけが「汚れ」から清め癒して下さる真実に期待した。だから、汚れから「清められた者」に対する儀式も準備した。

レビ記13-14章は古い時代の人々の心の深くにあった思いに触れるテキストでもある。

(3) レビ記第三部「清潔についての規定」(11-15章)の構成

レビ記第三部の構成を見ておこう。

ア) 清いものと汚れたものについての規定 11章

動物・鳥類・魚類、及び地上を這う生き物に関して、清いものと汚れたものについての規定である。清いものは食べてもよく、汚れたものは食べてはならない。何が清いものと汚れたものを分けているのかが問われている。

イ) 出産についての規定 12章

妊娠した女性の出産とその後の規定を記している。出産は人間の生命の神秘に出会う場面である。そこでこれを「汚れ」として、「触れてはならない」と定めている。

ウ) 皮膚病と清めの儀式 13-14章

13章は皮膚病、重い皮膚病および衣服に生じたカビに関する規定を記している。14章は重い皮膚病を患った人が清めを受ける時及び「清い」と宣言された家屋のための贖いの儀式を記す。重い皮膚病は最も深刻な汚れであった。

エ) 男女の漏出による汚れと清め 15章

男女の性的漏出を中心に扱っている。男女の性は生命を生み出す神秘を秘めている。そこで、いずれも触れてはならない「汚れ」として規定されていた。

2 皮膚病と清めの儀式 レビ記13-14章

(1) 皮膚病の判断 13章1-44節

13章1-44節は長い。しかし、ただ一つの事柄を扱っている。ある人に皮膚病が生じた場合の判断である。

皮膚病が「清い」とされた場合、該当者は通常的生活を営み祭儀にも参加できる。

しかし、重い皮膚病と判断されると患者は「汚れている」と宣言され、社会から隔離され祭儀にも参加できない。したがって、皮膚病の判断は慎重に下された。判定したのは祭司である。

13章1-8節は慎重に判断した様子を記している。皮膚病を病んだ人は祭司のもとに連れて行かれた。(2節) 重い皮膚病と判断されれば、患者に「あなたは汚れている」と言い渡される。(3節) しかし、判断できない場合は1週間隔離された。(4節) それでも判断できない場合は、さらに1週間隔離される。(5節) このように極めて慎重に判断が下された。

その間の患者と家族との息遣いが聞こえてくる。どのような思いで彼らはそれらの日々を過ごしたのだろうか。それは祭司も同じではなかっただろうか。彼らは切実な思いを秘めて、それ故に神への祈りと願を捧げながら判断の時を待った。

(2) 重い皮膚病患者の生活 13章45-46節

重い皮膚病患者の生活を13章45-46節は記している。

彼らが共同体から隔離されたのは衛生上の理由であった。しかし、この隔離には宗教的な意味合いが込められていく。祭儀からの排除が端的にこの現実を語っていた。それだけに患者家族の悲しみは深く、汚れへの怖れが人々を深くとらえていた。

「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を割き、髪をほどき、口ひげを覆い」(45節前半) という行為は葬儀に準じていたと推測されている。彼らは生きていながら、死んだ者の如くに振る舞わなければならなかった。地域社会において生活することも許されなかった。彼が歩くときは「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねば(45節後半) ならなかった。人々が近づいて、重い皮膚病の感染を生じさせないためである。患者の住居は宿営の外に定められた。この規定に期限はなく、癒される日まで彼らは隔離された生活を続けた。

ところで、家族は宿営の外まで食事を届け続けた。どのようにして届けたのかは記されていない。けれども、重い皮膚病を患っていても家族は患者との関わりを持ち続けた。患者とその家族の苦悩は計り知れず、彼らは悲しみの只中から祈り続けるしかなかった。

(3) 衣服に生じたかび 13章47-59節

古代イスラエルでは重い皮膚病が怖れられていた。そのために衣服に生じたかびに対しても重い皮膚病との関連が疑われた。

祭司は衣服に生じたかびの場合も1週間隔離して吟味した。悪性のかびと判断した場合は、「汚れている」(13章51節)とされ、焼き捨てられた。広がっていなければさらに1週間隔離した後に吟味し、かびに変化がなければ「汚れている」(13章55節)として焼き捨てられた。かびが消え去っていたならば、「もう一度よく水洗いすれば、清くなる」(13章58節)とされた。

(4) 重い皮膚病患者の清め 14章1-32節

重い皮膚病患者が清めを受ける際の指示が14章1-32節に記されている。

テキストに関して学者が共通して指摘している事実がある。この箇所は何一つ重い皮膚病の治療方法について記していない。なぜならば、当時の社会通念として重い皮膚病の癒しは人間の力を越えていた。唯一の可能性は神の癒しにあった。だから、人々にできるのは神の癒しを受けた人に対して清めの儀式を執行し、社会参加への道を開くことだけであった。

けれども実際には、清めの儀式を受けて社会復帰できた人は極めてまれであったと推測される。それでも、「重い皮膚病患者が清めを受ける際の指示」には救いがあった。なぜならば、この指示によって「死んだ如き者とされた」患者の現実が相対化されたからである。

現に、重い皮膚病患者として隔離されていた人々も、この指示を根拠として「神が働いて癒して下さるならば」という希望を持つことができた。

(5) 家屋に生じたかび 14章33-55節

「衣服に生じたかび」(13章47-59節)がそうであったように、家屋に生じたかび(14章33-55節)についても重い皮膚病との関連が疑われ、慎重な吟味を求められた。背景には重い皮膚病に対する人々の深刻な怖れがある。

3 立ち尽くす人々

(1) 立ち尽くす

レビ記の記していた「清潔についての規定」はあくまで規定であり規則にすぎない。これらの規定の背後に思いを向けると、人々の日常生活と彼らを深く支配していた怖れに触れることができた。

重い皮膚病は恐ろしい病気だった。いつ、誰が、この病に罹るともしれない怖れをいだきながら人々は生活していた。しかも家族の誰かが重い皮膚病に罹ったならば、彼らにはなす術がなかった。患者と家族全員が突然に大きな悲しみに覆われた。したがって「清潔についての規定」の背後に、重い皮膚病に対してなす術もなく立ち尽くす人々の姿が現れてくる。

現代人はこのように無力で立ち尽くすしかない人々に何を見るのか。なるほど近現代社会において医学の発展には著しいものがある。それにもかかわらず、私たちも実は無力さを痛感させられている。いくら科学が発達した時代ではあっても、人間は死と生との厳粛な現実の前に立ち尽くさざるをえないからである。

そうだとしたら汚れを怖れて立ち尽くす人々に、いつの時代であっても最も人間らしい人間を見るのではないだろうか。

(2) 「わたしは汚れた者です」と呼ばれる

規則との関わりがなかったならば、汚れへの怖れはそれほど深刻でなかったかもしれない。ところが、私あるいは家族または友人が皮膚病を患い、祭司による慎重な判断の結果、重い皮膚病と判断される。

この判定を境に規則は重い現実となって押し掛かってくる。「汚れた者」とみなされた患者は、「わたしは汚れた者です」と叫んで通りを歩かなければならない。彼は死んだ者の如くに見なされ、共同体から隔離された場所でしか生活できない。

そのような人々がいた事実を前提にして規則は記されている。ただし、レビ記は病気の原因については触れていない。なぜその人が病み、汚れた者とされなければならないのかについては何も触れていない。彼らの存在は社会の谷間に違いない。ところで、テキストは当時の社会の谷間について丁寧に述べている。つまり、聖書から彼らは排除されておらず、切り離されてもいない。

なるほど、いまだに救いは語られていない。しかし、聖書は彼らの存在を忘れてい

ない。淡々とした叙述の中に、谷間におかれた人々の悲惨な現実を聖書は忘れていない。

(3) 待望 — 清めの儀式と祈り

レビ記の描く規則は人々の気持ちを交えないで冷静な叙述を特色とする。しかし、詳細に描写された規則の背後から切実な祈りが聞こえてくる。それは神を待ち望むしかない待望の祈りである。

この祈りを受け入れる場所を聖書は設けている。それが清めの儀式である。重い皮膚病を患った者は直ちに見捨てられたのではない。そうではなく、彼らにも希望があった。神が癒して下さるならば、彼らも清めていただけるという望みである。この願いに基づいて清めの儀式が設定されていた。

だから、どれほどか切実な祈りが清めの儀式を待ち望む人々によって繰り返されていたに違いない。この祈りが呼び起こした一つの真実は人間の結びつきの深さである。人は一人で生きているのではない。心を通い合わせるつながりがあって、人としてふさわしく生きることができる。回復もできる。

このような人間の真実がイエスへの待望となった。

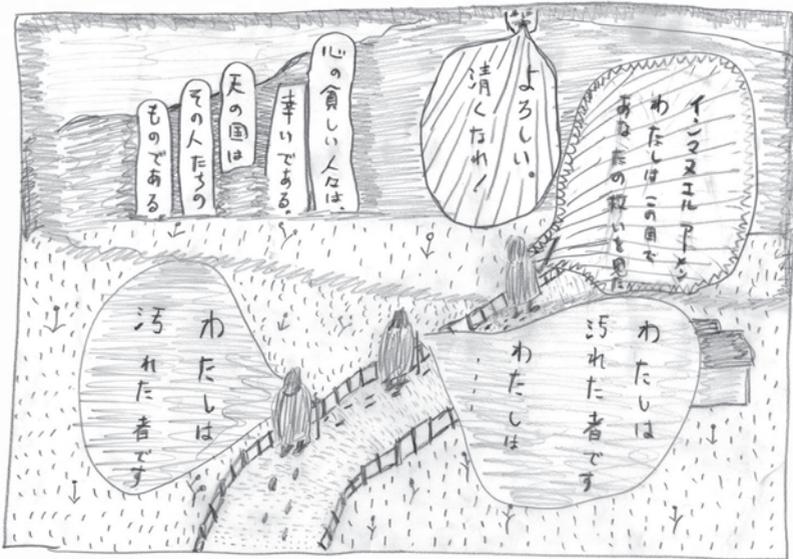
(4) 怖れを越えて — 救い

レビ記13-14章を踏まえるむと、よく分かるイエスの記事がある。マタイ福音書8章1-4節である。

山上の説教を終えてイエスは山を下って来られる。そこに一人の重い皮膚病を患う人が近づいてくる。健康なイエスに患者が近寄るのは律法違反であった。けれども、その人は律法を冒してでもイエスの足元にひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。(マタイ8章2節後半)

するとイエスは「手を差し伸べてその人に触れ」(マタイ8章3節前半)られる。ここには怖れを越えて人々と交流しようとするイエスの姿勢がある。その瞬間、長く隔離されてきた患者に人間としての尊厳が回復されている。ここに先行する救いがある。

次いでイエスは「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。(マタイ8章3節後半)レビ記14章が待望していた神による救いはイエス



スケッチ 天の国へとづく道

によって現実の出来事となった。その上で、イエスは清められた人に対して社会復帰に必要な手立てを取るように勧められる。(マタイ8章4節)

4 覚えましょう

(7) 重い皮膚病にかかっている患者は……「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない。 レビ記13章

重い皮膚病に罹った人はその病のために「汚れた者」とされた。彼らはその汚れのゆえに地域社会から隔離され、祭儀にも参加できなかった。突然に襲ってきた悲しみの中からどれほど切実な祈りが捧げられたことであろうか。

(8) イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。 マタイ8章

「汚れた者」とされてきた人に、イエスは手を伸ばして触れられる。その瞬間、隔離されてきた患者は手を触れあうことのできる人と出会っていた。それは心を通わせあう人間らしさの回復でもある。直後に癒しの業が行われた。